第一章　百年の伝統

激動の時代に礎を築く

創部　明治三十八年　春

「柔道は人間形成の一大修業なり、礼節を正し、質実剛健を旨とする」

この一条をスピリットとして、明治三十八（一九〇五）年四月、明治大学に柔道部が創設された。

明治三十八年といえば、日露戦役勝利の年であり、劇的な明治維新を成し遂げた日本が、近代国家として漸く国際舞台に登場した時代でもある。この昂揚した時代背景のもとに創設された明大柔道部の理想は、創部にあたった先輩諸氏の気概とともに、脈々と今日に伝わっている。

明治大学は本年で創立百二十四年を迎えるが、現在、傘下に四十三の運動部をもつ駿台体育会の中で、柔道部は最古参の栄を担っている。創部時の部長は松村定次郎法学部教授、師範は内田作造五段、部員二十六名で、「武堂」と呼ばれる道場が旧校舎内に設けられていた（この武堂は大正十二年の関東大震災で校舎とともに焼失している）。

周知の様に明治十五（一八八二）年、嘉納治五郎による講道館創立が、今日ある日本柔道の基点である。その講道館が「財団法人」として名実ともに日本柔道の指導的立場を確立したのが、明治四十二年の事であるから、その四年前に柔道部をスタートさせた先輩たちの進取の気象に敬意を表さずにはいられない。

因みに、この時期、また我々より数年先んじて柔道部を創部した学舎は、嘉納治五郎が教鞭をとっていた学習院、高等師範、そして慶應、早稲田、帝大、一高、海軍兵学校などである。

明治四十四年、初代師範の内田作造に代わって、この年大学を卒業した福田常雄三段が師範の任に就いた。福田は翌大正元年、有段者部員を引率して信越地方に遠征し、試合を行っている。これは後に、各大学でも恒例となった地方遠征のいわゆるハシリであり、国内の主要幹線鉄道が開通して間もなくの、この時代としては画期的な活動であった。この遠征に参加した部員は福田師範以下、新免純武三段、難波清人初段、多田利吉初段、八重野松夫初段で、福田は報告書簡で「この遠征は学校による団体柔道遠征の嚆矢とするところで、我が大学の誇りとするに足る」と述べている。

現在、明大道場には創部以来歴代部員の名札が揚げられているが、千二百名に近い名札の筆頭にあるのが福田常雄である。

三船久蔵の師範就任

大正二（一九一三）年、福田常雄に代わって講道館の俊才三船久蔵が師範に就任した。技熟達の域にあった三船五段の熱意溢れる指導により、部員の技術は飛躍的に向上した。部員数も大幅に増え、有段者数も創部先輩校の早稲田、慶應をしのぐに至った。

この年の秋、第二回の地方遠征を関西、信越で行い、成果を上げている。

大正年間に活躍した主な部員は次の通りである（カッコ内は卒業年）。

永島義高（大正五年）、吉田安（五年）、大島覚（七年）、
酒井忠治（七年）、浜野正平（八年）、牧野政信（十年）、川上忠（十年）、
鈴木潔治（十二年）、松崎太平（十三年）、縄田喜美雄（十三年）、
小田常胤（十四年）、八島輝徳（十二年）、山崎繁雄（十四年）、
島津軍二（十四年）、尾崎東（十年）、藤田保治（十四年）。

このうち、浜野、川上、松崎、鈴木、小田は後年九段位を贈られている。

東京学生柔道連合会

明治四十二年、講道館が財団法人化し、これを契機に柔道の普及が急速に進展した。学校柔道もこの流れに対応し、柔道部設置校を増していった。

大正十二（一九二三）年、それまで連合体を作らず独自の部活動を行ってきた在京学校柔道が連合組織の設立をめざし、創部先行校の高等師範、帝大、慶應、早稲田、明治、拓殖の代表が準備委員となり、三月、「東京学生柔道連合会」（東京学柔連）を発足させた。現在加盟三百二十校を数える「全日本学生柔道連盟」の基点である。なお、明治大学代表の準備委員は川上忠四段であった。

加盟校　帝大、慶大、早大、明大、拓大、農大、立大、高等師範、美術、水産、薬専、外語、日医（十三校）。

設立趣意（抄）

「――在東京専門学校程度以上の学校に属する柔道部員をもって組織し、学生の本分を守り、日本精神の涵養を念として会員相互の親睦と柔道発展の礎となることを目的とする――」

東京学柔連の発足により、翌大正十三年にはじめて、大会形式による大学高専団体対抗戦が「明治神宮体育大会柔道大会」（明治神宮大会）として開催された。この記念すべき大会で明大は決勝で早大に勝ち、輝く第一回の優勝校となった。

明治大学　1　――　0　早稲田大学

沼倉正三（三）　引分け　坂入直三（三）
佐久間弥太郎（三）　引分け　佐々木雄哉（三）
○縄田喜美雄（四）　体落　富木謙治（四）
中島新一郎（四）　引分け　鷹崎正見（四）
川又　務（四）　引分け　吉田康明（四）
藤田保治（四）　引分け　株本　保（四）

注・この大会に出場したその他の明大選手は、能美一夫（四）、大野大養（二）、和久井弘康（二）。カッコ内の数字は段位。

現在の全日本学生柔道優勝大会にあたるこの大会は、第二回大会から一部（大学）、二部（大学予科、高専）に分けられ、昭和十四（一九三九）年まで続いたが、戦争のため、この年の十六回大会を最後に中止となった。

明治神宮大会での明大の優勝は次の年度である。

一部　大正十三年、昭和十年。　二部　昭和二年、昭和五年、昭和九年。

東京学柔連が結成されて以来、この明治神宮大会優勝が各校柔道部の大きな目標となったのだが、当時の武道大会の主流は個人戦であったから、個人の力が注目される全国的な大会、則ち全日本選士権大会、天覧武道大会、明治神宮大会（個人）、講道館選抜紅白試合、全日本東西対抗戦、東京学連対全満州選抜戦などに出場し活躍するのが一方の目標だった。特に学生部員にとっては、東京と満州各都市とで毎年交互に開催される東京学連対全満州選抜戦のメンバーに選ばれる事が大きな目標であった。この大会は、昭和二年から十四年まで続き、全国の柔道ファン注目の人気イベントであった。

戦時下の柔道

記念館地下道場落成　明柔会発足

大正十二（一九二三）年の関東大震災で道場を焼失して以来、稽古場を持たぬ柔道部は警察、他校の道場、また町道場を回り歩くジプシー練習を余儀なくされていたが、昭和五（一九三〇）年の大学記念館再建に伴ってその地下に道場が新設された。

この年は大学創立五十周年にあたり、その記念行事の一つとして、新道場落成記念演武会がスポーツの宮様と国民に敬愛されていた秩父宮殿下の臨席を得て盛大に行われた。

爾来、この道場は二十五年後の昭和三十一年、小川町校舎に新設された道場に移るまで多くの人材を生み、明大柔道修練の場として斯界に喧伝される事になる。

新道場は畳の数六十四枚、隣の相撲部と共有の風呂場を持つというほどのものであったが、大震災以来約八年間、自前の道場を持てなかった柔道部にとっては掛替のないものだった。

新道場の設置に尽力してきたＯＢたちも、この機に部の支援体制を固めようと、それまで暫定的な活動にとどまっていたＯＢ会の組織改革に乗り出し、昭和四年、「明治大学柔道部の賛助と会員相互の親睦をはかる」事を目的に、全国ＯＢ組織「明柔会」を結成した。

明柔会の発足は以来学生と先輩との間を一層緊密なものとし、両者は正に表裏一体の関係となって今日に至っている。この一体感が現在の明大柔道を支え、また構築しているといっても過言ではない。その意味から、今日在る明大柔道の基盤となった地下道場の落成した昭和五年は部史前期のエポック年といえる。

発足時の明柔会の幹事名（カッコ内は卒業年）

鈴木潔治（大正十二年）、山崎繁雄（大正十四年）、島崎軍二（大正十四年）、花桐清二郎（大正十一年）、村上哲夫（昭和二年）、八島輝徳（大正十二年）、牧野政信（大正十年）、能美一夫（大正十四年）、尾崎東（大正十年）。

代表幹事の鈴木潔治はそれまでの明柔会仮事務所（神田区表神保町、勅使河原己幸方）を翌昭和六年、吉祥寺にある自宅に移し、同年から会報の発行と名簿の整理を行った。

アメリカ遠征

待望の新道場を得た部員達は正に水を得た魚のごとくであった。明大の練習を見たいと三々五々道場にやってくる見学者たちは、その稽古の激しさと熱気にみな驚嘆したという。そうした活況のもと、柔道部は明柔会の協力を得てアメリカ遠征を敢行した。昭和六（一九三一）年八月のことである。

メンバー（九名）監督・牧野政信、主将・武田五平。以下、小田明道、河野芳雄、富田盛、池田憲二、梶田義人。通訳・山田忠義他一名。

一行は八月二十七日に横浜を発ち、西海岸を中心に各地で試合やデモンストレーションを行い、また彼等自身、大いに見聞を広めて十一月十二日に帰国した。

現地の新聞はこの遠征を両国の文化の交流に資するものと評価し、アメリカ人が柔道に対する認識を高めたことと、移住日系人が感激した様子を、連日ページを大きくさいて伝えている。爾来、平成の今日まで、オリンピック

をはじめとする国際大会への出場、また各国への指導者としてどれほど多くの明柔関係者が海外に赴いたことだろうか。回数にして五百回は下るまい。長短期に滞在して指導にあたった国も有に五十カ国を超えている。

柔道がはじめて競技種目となった東京オリンピックから四十一年を経た昨年のアテネ・オリンピックには九十四カ国・地域がエントリーし、その日本代表に明柔から泉浩（学生）、阿武教子（OB）を送り込んでいる。

今後も国際舞台で明柔関係者の活躍が大いに見られる事だろうが、思えば七十四年前のこのアメリカ遠征がその嚆矢であった。

なお、アメリカ遠征は、昭和十一（一九三六）年に第二回を行い、第一回同様の成果を収めている（出発七月一日、帰国九月二日）。

メンバー（十一名）　監督・葉山三郎。部員・宮川周蔵、岩崎郁雄、大神慎文、鈴鹿寿、城戸勝守、小野智一、落合太郎、坂本清、福田康夫。通訳一名。

多士済々

学柔連主催の大会は、それまで団体戦に限られていたが、昭和八（一九三三）年から学生個人選手権大会が加わった。この大会は段別の選手権大会で、リーグ戦形式をとった。

明大の優勝者は次の通り。

二回大会（昭和九年）四段の部　保利永四郎
四回大会（同十一年）　二段の部　眞尾信明
五回大会（同十二年）　四段の部　佐藤春生
五回大会（同十二年）　三段の部　阿部庄兵衛
六回大会（同十三年）　二段の部　笹川一郎
七回大会（同十四年）　二段の部　久米　勝

この大会も団体戦と同じく、戦時体制に入った社会情勢のために昭和十四年をもって中止となった。

また、現在の全日本選手権大会の前身である全日本選士権大会は、一般の部と専門の部に分けて行っている。明大関係の記録は次の通りである。この大会も昭和十四年で終わっている。

五回大会（昭和十年）一般壮年の部　準優勝　葉山三郎（学生）
七回大会（同十三年）専門壮年の部　準優勝　浜野正平（OB）
八回大会（同十三年）一般壮年の部　三位　姿節雄（学生）

またこの時期、上記の大会以外で活躍した明柔関係者は、三笠宮天覧大会に優勝した姿節雄をはじめ多数を数えるが、この部分の記録は戦炎で一部散逸しているため、偏りを排する意味からここでは昭和年間、大戦勃発前後まで活躍した主な部員の名前をあげてそれに替えたい（卒業年は昭和十九年まで。カッコ内が卒業年）。

入江松次（昭和四年）、堀端狩夫（四年）、杉町仁市（六年）、西田東生（九年）、田口幸二（十年）、福田巽（十年）、鳥海又一郎（十年）、渡辺慶助（十一年）、田沢文雄（十一年）、村山要（十一年）、工藤勝太郎（十一年）、村上次郎（十二年）、石橋敏（十三年）、友部智一（十三年）、向山安雄（十三年）、金子操（十三年）、荒川広司（十四年）、法元保晴（十四年）、宮島竜治（十五年）、高橋康（十五年）、根本立（十五年）、黒木典行（十五年）、渡辺平治（十六年）、荒井健雄（十六年）、中西礼二郎（十六年）、遠藤文也（十六年）、菅井豊吉（十六年）、高須栄治郎（十六年）、千葉芳胤（十六年）、西田直吉（十六年）、松橋広司（十七年）、田渕裕巳（十七年）、浜敏雄（十七年）、井上市三郎（十七年）、三船芳郎（十八年）、斉藤雅夫（十八年）、川口一郎（十八年）、山口吉暉（十八年）、高橋秀豪（十八年）、石橋弥一郎（十九年）、田部富蔵（十九年）、遠藤一（十九年）、山肩敏美（十九年）。

中国大陸に端を発した日本と各国との軋轢は悪化の一途をたどり、昭和も十年代に入ると、国内の世相にもその影響が見られるようになった。

その情勢下で武道の振興は国策となり、柔剣道ともに全国レベルの大会が盛んに行われるようになる。

ヨーロッパの枢軸国ドイツ、イタリアと結んだ日本が両国へ学生柔道使節を派遣したのもこの頃であった。明大からは小宮良平（十六年卒）が使節として選ばれている（十三年）。

しかし、この活況も十四年までで、戦時色が高まるなか、この年を境に各大会とも中止の止むなきに至った。

学柔連も選手権大会の団体、個人戦とも昭和十四年の大会をもって最後としたが、主催の最終大会は十七年の学生東西対抗戦であった。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が開戦した。大半の部員は学徒出陣の号令によって、若手の先輩たちとともに、東南アジアや中国大陸の戦場に向かっていった。わずかに残った若手の部員によって部活動はかろうじて維持されていたが、実体はたび重なる空襲と作業動員、また食糧難のため、十八年後半から自然休部の状態であった。

開戦ほどなくして、第二回アメリカ遠征のメンバーであった坂本清、十二年の四段チャンピオン佐藤春生、在学中に五段位にあった渡辺平治とその弟の戦死の報せが次々と伝えられた。戦場に斃れた明柔関係者はこの四氏に留まらない。十二名の戦没者名が戦後に判明しているが、これとて伝え知る限りの人々である。

二十歳代の若さで死んでいった彼等にとって、明大地下道場で流した汗のひと時は短い青春の光芒だったに違いない。合掌。　（文責・小林敏邦）

昭和14年九州遠征。別府にて

戦後、柔道の復活

明大柔道クラブ

昭和二十（一九四五）年八月、太平洋戦争は日本の敗戦で終結した。戦時中、東京は連日のように空襲に見舞われ、都心は一面瓦礫の山と化したが、幸い明大本館は被災をまぬがれ、地下道場は無事であった。翌二十一年、戦地から戻って復学した古賀愛人（二十三年）、山崎昌徳（二十三年）、青木清正（二十三年）、堀口武（二十四年）等は明柔会の八島輝徳、小田明道、葉山三郎、斎藤雅夫等と共に柔道部復活の作業に着手した。

しかし、占領下の当時、学校柔道の活動は禁止されており、ＧＨＱ（占領軍総司令部）による厳しい監視の下、折角焼け残った地下道場も閉鎖されたため、復活の足がかりをつかめぬままに一年が過ぎた。

古賀等は、活動禁止令は学校柔道に限られている事に着目し、二十三年、学内に「明大柔道クラブ」というグループを発足させて部員を募集し、稽古は講道館、警察各署、また戦災をまぬがれた町道場で行うことを建前としながら、学内ではレスリング部と提携し、ＧＨＱには、「ジャパニーズレスリングの練習」とふれ込んで、マットで稽古をした。しかし、学内での練習であるから時には見張り番を立てた。

一方で上級生たちはＧＨＱのスポーツ局を相手に、学校柔道解禁の陳情活動を行っている。この活動には後に他校の代表も加わることになるが、当初はまったく相手にされなかった。しかし、めげずにほとんど定期的に続けたため、「押しの強さに負けたのか、我々の言い分が多少理解されたのか、ともかく体育課長のニューヘルド大佐と親しく話し合えるようになった」と、この活動の中心部員だった山崎昌徳が述懐している。

終戦直後、昭和二十一、二十二年の東京は見渡す限りの焼野原で、銀座も新宿も渋谷もなく、バラックの掘立て小屋がそこここにあるばかりで、希望を失った人々が空きっ腹をかかえて彷徨していた。日本中が餓鬼道に陥っていたこの時代に、あえて「武士は食わねど高楊子」の理想を実践した学生たちと、それを支えた若手ＯＢたちの青年らしい情熱と明るさには、他校にさきがけて学生柔道復活運動を行ったという事以上の意味がある。

明柔クラブは二十三年の十月に結成式を行っているが、この時、会場の大学本館中庭に参集したメンバーは次の通りである。

明柔会　八島輝徳、小田明道、葉山三郎、鵜目栄八、姿節雄、斎藤雅夫、久米勝。

学生　古賀愛人、山崎昌徳、堀口武、金谷久、宮崎博通、伊藤信夫、金子泰興、小野寺文雄、神田和夫、曽根康治、末木茂、大野忠博、門屋賢悟。

やがて明柔クラブの活動は地方のＯＢたちにも知られるようになり、結成翌年の二十四年には、明柔会の支援を得て柔道部が広島、福岡へ遠征している。また、この頃になるとＧＨＱへの陳情活動が功を奏してか、学内練習への監視もゆるやかになり、地下道場も使えるようになった。

学校柔道禁止令解除

終戦から五年を経た昭和二十五（一九五〇）年秋、念願の学校柔道禁止令がGHQの通達で解除された。

時代の背景を見れば二十五年は翌二十六年の講和条約の締結を控え、各分野で占領政策が解禁、緩和された年で、学校柔道の解禁もその一環であった。この日に至った要因はいろいろあったと思うが、つまるところ占領軍が統治中に柔道の本質を徐々に理解するところとなり、従来の柔道観を大きく変えた結果という事であろう。明柔クラブの復活陳情活動がその一助となった事は疑うべくもない。

この通達を受けて、翌二十六年、満を持していた学生、OBによって明治大学体育会柔道部が復活した。

部長　出口林次郎教授、監督　葉山三郎、師範　姿節雄。部員は金子泰興主将以下四十二名であった。

そして解禁と同時に発足した全日本学生柔道連盟によって、第三回全日本学生柔道選手権大会が、二十六年十月、大阪で開催された。この大会は個人戦のみで、会場は大阪野球場に特設された野外の試合場であった。

この記念すべき大会の優勝者は明大主将金子泰興である。

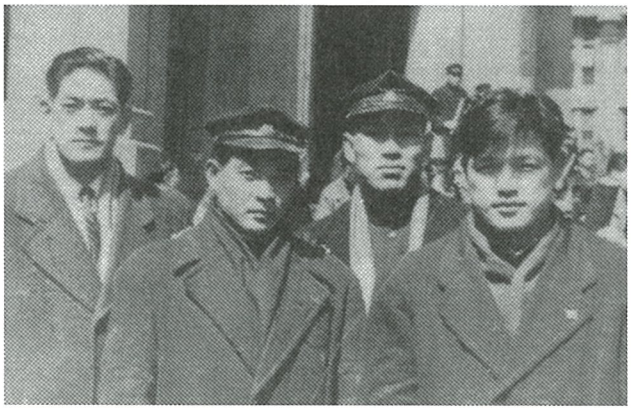
目黒合宿所　姿寮　澄水園

念願の学生柔道解禁で、本館地下道場は連日稽古の熱気でむせかえっていた。

昭和二十六年といえば、漸く戦後復興のきざしが各方面に見え出した頃ではあったが、国民の生活はまだあらゆる面で耐乏を強いられていた。そんな中で、地方出身の学生が東京で食住の安定を計る事は至難のことであった。約五十名の部員を抱える柔道部も、その多くは地方出であり、部員の食住の確保は練習以前の問題であった。結局は東京在住の先輩たちの奔走で徐々に良い方向に向かっていく事になるのだが、携わったOBたちの労苦は並々ならぬものだった。

当時、部員のうち主な者は大学の寮である白雲寮（葛飾区堀切）に寄宿していたが、人数には制限があり、早急な合宿施設の確保が待たれた。幸い、間もなく大学との折衝が実り、目黒区下目黒に待望の柔道部合宿所が開設されて約二十名の部員が移り、小田明道OBが舎監となった。この目黒合宿所は戦前に建てられた木造二階建ての一般家屋で、爾来、平成九（一九九七）年の改築まで実に四十五年間使われることになる。一方で師範の姿節雄は勤務先の中山競馬場内の施設を借り受け、「姿寮」として十名を寄宿させた。姿は数年後にこの施設の借用契約が終わるにあたり、自宅を一部改造して寮をここに移した。この姿寮は昭和四十九（一九七四）年に閉じるまでの二十

白雲寮の寮監をしていた久米勝



明柔クラブの立役者たち。左から山崎、青木、古賀、影山（相撲部）

三年間、合宿所の機能を果たした。河辺一彦、岩崎勇、塩見泰之、甲斐福男、作田順二、立花敏明らが姿寮初期の寮生である。

部員の食住確保の苦労を思う時、昭和二十七年から同四十七年までの二十年間、毎年十名前後の部員を預かってくれた社会福祉法人「澄水園」の鵜目栄八理事長の支援を忘れることは出来ない。氏は部員たちを施設のアルバイト職員として寄宿させ、授業、稽古の時間を考慮した作業の時間割を編成し、彼らが食住の心配なく部員生活を送れるように計ってくれた。

部員たちも、もちろん早朝、夜間、休日に与えられた義務を果たして、氏の配慮に応えたのだが、長期に亘り大変な支援をいただいたものである。

この澄水園組からは、徳永三幸、神永昭夫、大橋武彦、重松正成、高田誠之助、朝田紀明、坂口征二、村井正芳、山本裕洋、上野武則、篠巻政利、安斉泰人、川口孝夫など、後の時代を背負った逸材が輩出しており、その点では氏の応援に応えたものといえよう。

また、澄水園の職員として理事長を助けて、二十年の間学生たちの生活指導にあたった工藤欣一ＯＢ（後に副園長、昭和五十九年退園）の尽力も忘れてはなるまい。

昭和二十七（一九五二）年に至り、目黒合宿所と姿寮の開設、澄水園の協力などで主な部員の食住は一応確保されたことになる。

話が戻るが、ここに至るまで、すなわち明柔クラブの頃から一連の合宿施設が整うまでの二、三年の間は、当時、白雲寮の寮監をしていた久米勝ＯＢが苦労した。久米は主な部員を寮に入れていたが、寮は大学の施設であるから当然寮長といえども越権行為は許されない。しかし、久米は持ち前の交渉能力を発揮して大学当局を説得し、目黒合宿所が出来、曽根康治、山尾英三、石橋毅次郎らの主力が移った後も十名に近い部員の宿泊を認めさせていた。ちなみに白雲寮の全寮生は二十名である。これも混乱期なればこその話題である。

こうして食住のうち「住」の方は形がついていったのだが、食い盛りの学生にとって「食」の確保は日常の課題であった。

当時、主な食糧は配給制で、主食は米よりも芋類や小麦粉の方が多く、割り当ての量も少なかった。

したがって、都民の多くは近県や郊外の農家に出向いて、いろいろな食糧を買い込んで補充した。現金の乏しい人たちは衣料品などを持ち込んで食べ物と交換したという。この〝買い出し〟という社会現象は昭和二十年代で終わるが、当時の部員で〝買い出し〟の経験のない者は少ないはずだ。

「飽食の時代」といわれる現在、学生たちにとって当時の話題は昔話であろうが、ある先輩の次の一言を頭の隅に留めておいてもらいたい。

「肉やタマゴなどめったにお目にかかれず、大袈裟にいえば、みな栄養失調寸前の体だったが、一日の練習量はいまに勝っていたかも知れない」

さて、ここまで、創部期から戦中、戦後の苦労を乗り越えるまでの部の活動を記してきた。部史の前半にあたるこの五十年の歩みをふり返って思うことは、輝かしい戦績もさることながら、創部以来脈々と保持されてきた学生と先輩との絆の深さについてである。戦後の柔道の歴史に一定の足跡を印してきた明柔の活躍も、みなこの基盤の上に成ったことである。

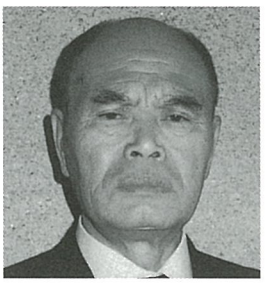
我々がこの伝統を維持出来る限り、明治大学柔道部の将来に不安はない。

前述のように、学校柔道解禁を受けて昭和二十六年、戦後第一回の全日本学生柔道選手権大会が開催された。この大会に於ける明大主将金子泰興の優勝は以後、学生柔道のみならず、日本柔道界に大きく関わりを持つことになる明柔発進の号砲であった。

（文責・小林敏邦）

新免純武先生の手紙

一九四一年度卒　姿　節雄



この手紙は、我が柔道部先輩中、最も古い先輩で、当時柔道界に驍名を馳せられた新免先生に昭和二十八（一九五三）年、私が創部当時の状況を照会した時の返信（抄）である。

新免純武先生略歴

一、明治二十二年十月生
一、大正四年明治大学卒
一、昭和三十七年九段
一、永年の間松江高等学校（現島根大学）柔道師範
一、昭和四十二年九月八日死亡

明治大学柔道部の創部は私はよく知りませんが、多分、明治の終わり頃でないかと思う。私が錦城中学生時代に数回練習に行った事があります。其頃の校舎は現校舎より御茶の水の方へ約半町右に曲がり右側にあった様記憶に残って居るが、古い校舎で道場も其一部にあり部員も少数の様であった。

道場は現校舎も其頃とは違い改築されて居るが、地域は旧の儘の様ですが神保町側にあって「武堂」と云う標識が玄関に掲げてありました。師範は最初は内田作荘氏でなかったかと思います。其後福田常雄氏が当たって居られました。

大正元（一九二二）年十一月、信越地方へ柔剣道遠征を行い、其人員は左記の通である。

柔道師範三段　福田　常雄
三段　新免　純武
初段　難波　清人
〃　多田　利吉
〃　八重野松夫

剣道師範　今泉　来荘
菰田　正則
上田　潔
田島　秀雄
寒河江　馨

此遠征が学校による団体武道遠征の嚆矢とする處であって以て我大学の誇りとするに足ると思います。其後安川一貫氏の率ゆる早大や慶應二高などが致した様です。

第一回柔剣道信越遠征記念として大正元年十一月十九日、武堂前にて撮影した十名の写真は今も手元に保存して居ります。殆ど戦後は通信しませんが難波君は代議士として活躍して居たが物故し、田島君、菰田君も会社重役との事でしたが消息不明、多田君は岡山在住、八重野君はブラジルに卒業後渡航是又消息を知らず、今泉氏も幽明異にしたとか聞き、往時が懐かしく、写真を見ては若い日の事が夢の如く幻の如く思い偲ばれて誠に感懐に堪えざえるものがあります。私より以前の創設期に就いては福田常雄氏に御問合わせ下さい。

次に第二回遠征は大正三年秋で、長野より糸魚川、富山、高岡、金澤、福井、武生、敦賀、宮津、大阪に行きました。此回は三船先生も同行される筈であったが何かの都合にて左の四人にて出発した。

三段　新免　純武
二段　多田　利吉
初段　永島　義高
〃　吉田　安

此回は第一回より以上の好成績で多大の成果を挙げ、各地でも大歓迎で実に快適な遠征であった。

然し残念な事には永島君が長野で鎖骨を骨折し帰京せざるを得ぬ破目になった事であった。金澤に着いた頃は皆相当に疲労して居た。私は会計、旅館の交渉、日程の変更、道場では少しの休憩もせず練習し、前後の挨拶、投の形を吉田君と極の形を多田君とやり、歓迎会の挨拶等一切一人でした。外新聞社に毎日通信（これは寸暇ない為汽車中で書いた）をした為疲労も一層甚しかったが、歓迎会後は其地の先生達が旅館に詰めかけて東京柔道界の話など聞きに来て中々帰らず、十二時、一時頃までが普通であった。

其れでも宮津迄は三人で無事突破したものの大阪に着く前に多田、吉田両君は腹痛とかで帰京し私一人大阪に乗込んだのである。会場は北野天満宮境内武徳殿で、大阪在住の柔道家は戸張六段伏見教士、小島友次郎四段（日本銀行員）をはじめ全部を網羅し、其他医大学生、各中等学校生徒、警官等無慮二百名、如何に鬼人と雖も悉く練習する事は不可能である。

そこで小島四段と浦井三段（東京独協中学出医大生）に応援を頼み稽古を初めたのが一時半頃、約三時間半、一瞬の休息なしに練習し、心身全くくたくたに疲労したので、時間でもあり中止した所、東京出立前、既に聞知して居た大力無雙を以て有名な強豪岡崎三段、彼はさる料理屋で何か忿懣して仲居の首筋を猫の児の様に片手で釣るし上げ、二階の段上より上下に打ち振り右手を以て頬を打ったと云う其豪勇岡崎三段が出て来ないので聊か安堵の胸を撫で下ろす刹那、「一本御願いします」と目前に其巨躯を見た時は全く目もくらむほど驚いた。

然し一段挑戦されて今更後へ引くもいまいましく感じたので一禮して立ち上ったが此時程真剣勝負の気合に満ち満ちて欝勃たる闘志の旺盛に湧き立った事はなかった。

とは云うもの、私は今迄三時間半の健闘で身心共に綿の如くなって居たので、気は徒らにはやるけれども投技のききめは薩張りなく、さりとて寝技に移ったが最後此強力で押へられたら何らの抵抗力もなく組み伏せられるは必定と思ったので此所は機先を制するにしかずと對手を引っ込み絞めようとしたら、私の絞業を恐れてか強引に立ち上がった。斯くて暫時立ち技に移り揉みに揉み合ったが遂に相互に技あり程度も取れず五分五分で、練習でない寧ろ試合と云うべき其試合を中止する事となった。

斯様にして最後迄黒星とならず兎に角此第二回遠征は大功果をおさめて東京へ単帰帰ったのである。

次に三船先生の就任は福田常雄氏が大正元年十一月遠征を共にした後、多分大正二年七月辞任したかと思うが、適任者が中々見当らず、広島より佐村先生が是非との御頼みであったが、明大丈では到底生活するに足るには遠く及ばぬ状態故に御断りし、小生自身ではと学校に申出でた所、学生で教師はいけないとの事であった。

そこで色々物色したが、永岡先生は近くの日大、飯塚先生は慶應にあり、三船先生より外にないと申出でたら、二、三反対する教授があって実現困難、私は現在立派な柔道家である何が故に反対さるるか、全部員一同の熱望であると強硬に主張し、遂に三船先生に決定した次第である。

これらより考えると、多分、大正二年秋でなかったかと想像される。

其の当時は前記武堂に剣道と柔道の道場が併畳しあって、畳数は五十枚くらいであった様だ。冬は大火鉢に炭火をおこし、部員が集まって談笑し誠に楽しい極みであった。

中には講義は二の次にして、校門より直ちに道場に来て、朝から教室には入らず、道場通のみする連中もあり、午後には愉快に練習して帰る者があった。全く学生か武道修行専門か訳が分からなかった。

其の頃は京都武往会有段者は講道館有段者よりも実力が劣って居たので、許可を得ずして黒帯を締めて居ると、私が稽古して、「君は初段の価値なし、白帯をせよ」と命令し、名札も一

段の所に掲げたものだった。

当時は春秋に各学校の柔道大会があって、先づ無段者試合、形、次に有段者試合、最後に五人掛と云うのが定則で、有段者試合が一組でも多いのを盛会だとし、誇りとして居た。

所が、永岡先生が京都から来られて日大の大会に京都武徳会有段者を有段者試合に挿入して講道館有段者と取組ませたのを見て大いに驚き、吾々も一組でも有段者試合多きを喜ぶので今迄一級で試合させたのを直ちに名札も初段の所に掛けかへ、有段者試合に出す事にした。

（『明柔』'82・Lより）

感想

一九二五年度卒　**小田常胤**

大正も未だ四、五年頃は、明大柔道部も漸く柔道部らしい形を僅かに作って、将来に稍々望みを嘱して居た時代であります。内田作藏氏が師範を引退して福田氏が師範になり、新免氏が学生であり、師範の様な形でありました。

暫くして現在の三船師範が代ったので、俸給も慥か十八円位であったと記憶して居りました。当時売り出しの三船五段は、粉骨砕身、明大柔道部の為に努力され、部員の発達も大に見るべきものがありました。為に明大も急速度的に部員も殖へ、有段者の数も加はり早慶と伍して遜色なきまでに達しました。驍名を一時馳せた高師の岡部氏と新免氏の講道館に於ける一戦は、今日過去の語草になりましたが、当時は評判の試合でありました。大島氏など櫻庭氏と数回戦いました。酒井氏などと云う一種独得の業をもった人なども当時の人でありました。それから数年前、都下各大学リーグ戦が挙行されることになり、選手は学校の練習を終へられてから私の道場に立寄られ、熱心に研究されました。死んでも戦はなくてはならぬと云う勢でありました。全く意気と熱其の物でありました。

中島氏と藤崎氏の試合は最も猛烈で、引分けの宣告が下ると同時に中島氏の心臓は止まりました。人工呼吸や手当で回復し、更に慶大の山川氏と戦った様な有様でありました。又其の当時大将であった藤田氏は例の慶應の浅見氏を物の美事にあんなにも大きな人を投げ得られるものかと感ぜしめた。其の後、大正十二（一九二三）年の関東大震災で舊校舎は烏有に帰し、古錆びた想い出の多い道場も焼け失せて仕舞いました。

（『明柔会々報』第三号）

感想

一九二三年度卒　**鈴木潔治**

まだ明大に入学は許されていなかった時、客分の様な形で、明大柔道部の人達と四高の夏稽古に加わったことがあります。一行は確か十二人であったと記憶いたします。

金丸君、濱崎君、橋本君、松本君、中島君、坂本君、八島君、渡邊君、田多君、吉村君、長濱君、それに私です。

そして私共は全部四高の△△寮というのに泊まったのです。あまりにも寝業に自信の無かった私共は無段者揃いの四高選手に東京の空が戀しくなる程鍛えられたことを追想いたします。三船先生は奥様、お嬢さんと御一緒で金澤へ着くと、夜汽車で疲れて居ることなどには一瞥も呉られず、赤い眼の一行は四高道場へと案内されたのです。

早速稽古衣になって道場へ這入ると、対手欲さの選手諸君が待って居たとばかりに申込んで来ます。何の白帯がと立ち向かい、稽古衣を持つや否やすぐ引張り込む、足を攫って引っくり返す、白帯奴など何程の事があろうと押いさせれば対手は仲々の曲者、逆に絞に妙この変化を見せて起きるどころか免れることすら容易でない。漸やく上になり此時とばかり押いてはやったが、三十秒は愚か五十秒や一分では決して参らず、此方の腕が凝ってポロリと離れるまで下で動いて居る。そして離れればまた猛然と攻めて来る。

十分二十分、まだ対手は止めそうもなく、此方から止めるというのも癪だから懸命だ。四十分位は過ぎたらと思うが、対手は依然として動いて居る。頭はガンガンし、眼は汗やら涙やらで対手の上になることを許されぬが、やっとの思いで上になった時、「君止しませうか」と妥協をしたが、「もう少し」との返事、果ては下にされて攻めたてられ、「有難う」という対手の声を聞いた時は、手足の筋が突っ張り、脊骨が曲って伸びそうもないものの、一時間も過ぎたかと思う頃だ。

そして道場に居れば、呼吸つく間もなく次々と対手が来る。

翌日から裏の更衣所に我等の数が殖えて、道場内には僅か三、四人を残す日が多かったように思います。

立業がやり度いなあ。

寝業ばかりして居ると、立業が下手になるさうですね。

留めて呉れるな、あすは東京へ帰る。

誰だったらう、こうした悲憤を漏らして居ったのは。或は自分もその一人でなかったろうかと今に思い出されます。けれど金澤はよい所でした。皆なと仲よくはなるし、寝業も相当上達したし、それに故郷と同じ様に啼いてくれた窓際の蝉、あの甘ったるい言葉で話す宿の娘、九官鳥の居る洋食屋の夕等々、どんなに私共の旅愁を慰めて呉れたことでありましょう。

（『明柔会々報』第三号）

柔道部の現在を語る

一九三一年度卒　**古賀治朗**

本年度委員に任命された私等は旧弊を一掃し、すべてを新しく革正し、対外的に進出する事を約した。（中略）

我が柔道部が稍もすれば講道館に附属せる如く考えらるるは残念であり、また部員の中にも、自分は講道館で練習して居るから学校の道場には出なくとも良いと云う誤解を排する為に「我が部は講道館に隷属せず」と述べ、その依って来る部の独立自尊的存在理由を説いたのである。それから従来の段制度を排して部員制度とした。これには可成りの反対があったが、矢張りそうなる理を説いて反対部員の了解を求めたのである。

それは確かに何所で見ても、段別に札が掛って、段がその標準を示して居たのが、我が部ではすっかり一様になり、部員の入部順に札が掛って居るのを見た時、意外に思われるに違いない。これは単に小事の様であるが、重大な反響を生んだことは事実で、先輩の或方からも非難されたが、我々はそうしなければならぬ理由を認めた。そして段制度が弊害として存するならば、よろしく改革すべきであると断じた。與論に基附ば斯く云う。

我々は柔道をやれば良い。理想に進む道に段別のある筈がない。段はその希望を満足せしむる手段であり、段に依って云々さるべき性質のものでない。標準でもない。五段であるから、六段であるからと云って柔道の理想が実現されるものではない。その意味からして現在、講道館の段なるものが何處に標準を持って居るのかと疑い度くなるのは事実だ。そして次第に権威

が失われて行くように感ぜられると云うも無理からぬと肯ける。

自分は講道館何段であるからと、まして三段以上でも取って居る新入部員が大きな顔で居るのは実に不愉快なことで面憎い。そしてその高段者が実力的にヒロイズムに駆られ、潜越行為を平然と行使するに於ては、全くギャングの存在であり、無警察状態の不安を招来する。

そしてまた、部の遠征、並びに選手の推薦に当り、彼は何段であるからと理由附けられるのは正しく学生精神に反する。何處までも人格的に、学年別の礼儀を重んずるが当然である。その餘に実力が加味されるべきであろう。それから、自分は三段とったからとか、四段に成ったからとか所謂自己満足に溺れて柔道より遠去かるは面白くない弊風である。

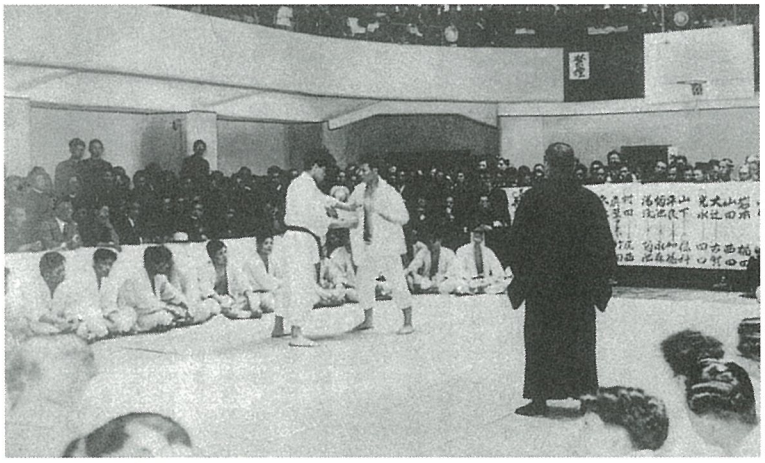
部は部全体の権威がある。この全体的権威より見る部員の個別的段なるものは実に微細であり、いやしくも個人に依って専横を極め、最高段者なる故を以て自負し、天狗的存在を気取るは笑止千萬である。いやしき根性の権化である。

部の権威は個々部員の肩書きを寄せ集めて造らるる形式でなく、その様な軽薄な存在ではない。我々は部の権威増長を計る分子に過ぎないのではないか。我々はこの間に反省し、自覚し、精進すべきである。

数へ挙げれば可成りある。実力と段、人格と段、その一致は非常に難かしいが、矛盾は多々見受ける。それは段の生産者講道館に飛ぶ問題ともなろうけれど、我が部の指摘するところここに存し、以てこれが改革を計る可く輿論が興じたるが故に、この段制度廃止を断行したのである。

我々は只練習するのみでなく、柔道の本質的認識を研究する使命と批判的観察が必要である。即ち部員の自覚を待ち、それが善導にあると考えた。

現代スポーツ謳歌の時代にスポーツたる一面の要素を含む我が柔道が他のスポーツに圧せられて居るかの如き観あるは何故か。或人は云うかも知れない。柔道は人に見せる可きものではなく武道として内に修むるものなりと。しかし大衆に迎合して歩を移すのは決して大衆に媚びる理由とはならないのみか、柔道の普遍性を如実に現出するものではあるまいか。人々に依ってその見解も異るであらうけれど、そうした問題を考へる事は良いと思はれる。部員が今少し自覚して、何の為に柔道をやって居るかと云うことを真面目に考へて頂き度いとは、我々の希望するところである。即ち実践哲学として不知の中に感得される偉大な味がこの柔道の中に含まれて居ることを探識せんとする純正なる求道精進の気迫があって良い。



昭和8年6月、明大対警視庁の対抗試合。右が古賀治朗選手

我々は対外進出の名の下に積極的活躍を期待した。その手始めとして、彼のロスアンゼルスで開かれたるオリンピックに対し、日本よりのレスリング選手を体協で求めて居る機に乗じ、幸い昨年渡来した我が部の選手を基礎にレスリングの練習を開始し、豊島氏の斡旋に依って上智大学教授桝居伍六氏をコーチャーに迎へて専心努力し、ここにレスリング部の新設を計った。

遂に我が部より河野君を彼の地へ送った次第である。

あの国家を挙げて、オリンピック狂時代の中に微たりとは云へ、我が部が日本レスリング界をリードし、幻惑的雰囲気の中に有って敢然たる進出と厳然たる存在を示した事は、社会の認むる事実、我々の本望であった。我々は実に目覚しき活動を成したと快心の積りで居る。

それから早慶明柔道リーグ戦の舞台をつくる可く学生柔道聯合会の訪満遠征を機会として、早慶の幹部を説き、新競技技法と審判規定を指示し、現柔道界を批判して三校の団結的存在の必要を説いたのである。然してその了解を求め得たる九月下旬、第一回三部代表委員の座談会を催し、これが具体的実現の案を練り、三校柔道部の親睦を兼ね、互いの提携を約したものであるが、新競技法に就いて早大の意見が我々慶明の意見に同せず、頓挫の型になって居る。けれどもいづれまとまるものと確信して居る。これは行詰れる柔道界に対し、奇想天外の貢献的事実として現われるも遠き日ではない。

我が部は十月下旬、各大学並びに斯道各団体を招待し、部内選手権大会と称して我々が構案せる新競技法を用いてお目に掛ける事になって居る。これには三船師範も多大なる賛同の意を表されて居るから、必度見る可き物があるものと考へて居る。かくする事に依って斯界に貢献するを得ば、我々の無上の喜びとするところである。我々は指導される時代を過ぎ、研究と批判の時代に入って居る。やがては国家を背負って起つべき時に当る準備時代である。

與えられた機会に與えられた職責に精力の善用を計り、自他共栄の策を立て、目的に勇を鼓舞して猛進するのは、若人の誇りかつ青年の持つべき意気ではあるまいか。

我が部が彼の警視庁と過日一戦を交へたる成績を見よ。六対五、結果に於て敗れたりとは云へ、その堂々たる戦績と闘志振りは斯界の驚異を呼び、明治の熱血的覇気を表現したる一例であらう。現在、五段二名、四段十名を越え、三段二十数名に昇り、その実力と人格を誇る者数を争いて部の内容を固め、熱火飛散る猛練習の気鋭、道場を圧して駿台に誇る体育館を鳴動させんばかり。嗚呼、これ久しく待てる黄金時代の現出か、警鐘乱打し、情眠を破る明治学徒の粋なるか、それは正しく意気に於て、熱に於て力に於て完璧の所業、我等は進む一致協同、以て母校柔道部の名誉の為に。

（『明柔会々報』第三号）

注・筆者は本学OBの作曲家古賀政男氏の実弟。

明大柔道部の現況（昭和五年）

橋本　記

何と言っても、現在華やかに展開して行くのはスポーツの世界である。而しそのうちにあって只吾が柔道のみは古色蒼然、あまり晴々のしない姿の儘残され、伝統されている。と言って進歩がないと言うのではない。あらゆる方面にその進歩の著しさは認められる。只他のスポーツ競技の如き華々しさがないと言うのである。言換えればジミであり、慎重であるのである。それが現今に至り、漸く天覧御前試合を始め、明治神宮大会等種々の催しがあるために、非常な斯道作興の普及となり、発達となって来た。そして力、技術等に至りても、理論的に力学的に、段々と研究されつつあるのである。

而して、この普及と言う言葉は多くの人々を斯道に導くのである。大衆の間に理解せしむるのである。

故に吾が部でも、年々とその新加入部員の増加は著しいものである。又特に目立って来たのは初心者の入部者の多いことである。選手制度の意識の強い吾が部等は、実は初心者の入部は可成当惑するのである。しかし、或熱心な人が

可成当惑するのである。しかし或熱心な人が居て受身の練習から教へて居る。然しこれ等の初心者が何時迄根気よく、既に長年練磨した者の間に伍してやって行けるかが問題だ。（中略）

兎に角、道場に出席率の尠いのは確かに部員の道に対する熱心さが足りないことを明かにしている。時々先輩から聞かされる昔の柔道部の如き素朴さと純情が段々失はれかけている。柔道部の人だと言う感のする純朴なる人が少くなった。時代の進展につれて段々とそうなって行くのが当然であるかもわからない。そうして各人の間に、何かしらん見えない壁の様なものがあって、裸と裸でぶつかってもいいという様な人が少ない。（中略）

只今も毎日、牧野、中島両先輩が熱心に稽古をつけて下さる。実にこれは部内の空気を一新するものである。その他の先輩も時々忙中閑を見て稽古に来て下さる。こんな先輩にぶつかって稽古するのは何とも言へぬ心強さを感じて嬉しくなるのである。他力本願かもわからぬが、こんな気持ちから吾が柔道部は発展するものである。

五月末葉、今上陛下御成婚記念全国中等学校争覇戦をやっている。今年既に第七回の誕生である。参加校は四十校も数へる様になった。

そして広島、新潟等よりの参加もあって、愈々全国的になって来たのである。この大会は益々進展させて行きたいと思っている。

八月下旬より九月上旬、夏期合宿をやっている。「合宿」と言う言葉と「遠征」と言う言葉は先輩諸兄にはかなり懐しい想い出であることだろう。夏の合宿の練習気分、それに遠征に自分の翼を思う存分揚げて帰って来る気分は、柔道部選手のみの知味し得る痛快味であろう。そして秋は大学専門学校リーグ戦に出場、種々の問題あって大学部の方は遅滞した形になっていて出場しないが、予科の方で専門学校の部に参加して第一回出場（昭和二年秋）には吾が精鋭断然優勝月桂冠を得たけれ共、その後二ヶ年は敗惨の恨を呑んでいる。今から予科の選手も力瘤を入れている。

冬になれば寒稽古を開始し、最後の日には卒業生の送別会を催して一ヶ年の部の幕が閉じられるのである。

現在部員は百二十数名、四段八名、三段十三名、二段初段五十有余名を有している。表面的には偉大なる存在である、実力の云々は別として。

只今道場は体育館の地下室の西端一隅に変形的な五角形の畳の数さへ数へられない、まあ強いて言へば五十幾畳分かの誠に狭隘なるものである。大明治の柔道部の道場としては、あまりにも貧弱なる存在ではあるまいか。体育館として誇るには少々情けない気持ちになる。通風採光は不良、雲天の際、雨天の日は新聞さへ読めないのである。

あまり苦情ばかり書き立てると飛んだ所からまで怒られるからもう是の位で。

暴言多謝　（昭和五年五月二十九日）

（『明柔会々報』第二号）

全日本柔道選士権大会出場記

一九二三年度卒　**牧野政信**

此度の試合は、最初各府県毎に予選を行い、更に全国を北は樺太、北海道から、南は台湾に到るまで八区に分ち、その区の予選に優勝せる者が、十一月十五、六両日の神宮外苑に於ける大会に出場したので、その全国的なるは柔道史上空前であらう。また選士も一般選士（柔道を自己の修養又は趣味として修業し、これを専門とせざるもの）、専門選士（柔道の指導を主要の任務とするもの）、更に年齢に依り壮年組前期・後期、成年組前期・後期の四つに区分し、其の他審判法の改正、明治神宮外苑にて公開等、その形式に於ても柔道界画期的壮挙であった。

一部の人は一子相伝式柔道論を持ち出して今回の如き公開を反対した様に聞くが、今日の柔道は攻撃、防御を第一義とする昔の柔術のそれでなく「精力善用、自他共栄」をモットウとして世界に向て呼びかけて居る今日である。なるべく多くの人々に正しき柔道を理解せしむるは目下急務であると信ずる。公開不可どころか、将来は毎年、少なくも隔年位には今回の如き、否より以上の大会を催されん事を切望する。

次に今回、長い間懸案であった入場料問題が出た。初め自分は収入を選士個々の収入とせず、大会そのものの費用として支弁するなら一向差支へないと考へて居た。大臣の演説会でも、学生の野球でも、神宮競技でも、入場料をとるではないかと。

然るに、自分がいざ出場となると、たとひ今回の如き寄附者へ招待券を出す形式でさへ、好い心地はしなかった。人間は第三者のときと直接その立場になったときとの心持の異なるに苦笑した。

将来は富豪の誰かが大会の費用位は寄附されて、一般大衆に無料で公開したいものである。

今回の試合は、自分に取って十数年振りの試合である。大正八年、講道館紅白勝負以来であるので、出ようか、出まいかと就ては随分迷ったが、熱慮の結果、時期も好い、年齢も人生の最も元気な時代である、自分の柔道修業のエピローグの試合として出場しやうと決心した。それは丁度十月五日であった。翌六日より、睡眠、飲食等厳守すべき表を作り、酒、煙草を禁じ、猛練習を開始した、母校明治大学道場及び講道館下富坂道場にて、多き日は五、六時間の長きに及んだ。その為に出場決心の当日、二十三貫六百目あった体重が、大会前日に二十二貫五百匁と、約一貫目以上も減じた程であった。

東京予選（十月八日）の相手は加藤泰司四段で、体力もあり寝業もやるので、かなりの苦戦で、大外の返しで字義通りの辛勝であった。

第二区予選（十月二十五日）は、鷹崎正見六段が神奈川より出場した。彼は早大の大将、神宮大会の優勝者、四段、五段を稽古する鮮やかさ、かく考え来る時は、氏を破る事は僕にとって最大の苦心であった。先輩の意見を聞いたり、鷹崎氏と似た業、長身等をもっている人と稽古したり、出来るだけの研究を積んで出場した。

僥倖にも右跳腰を返し業で強豪鷹崎六段を破った。それに勢ひ付てか、埼玉の曾根選士は跳腰で、千葉の菅崎選士には大外で割に楽に勝つ事が出来た。これに依て、愈々最後の晴れの大会に出場する資格を得たので、少年の時のような朗らかな喜ばしさを感じた。

然るに、人間の不幸は予告なしにやって来る。十分すぎる程注意したにかかはらず、二十六日に松茸にあてられ絶食――粥食の数日をよぎなくされた為に稽古も充分出来ず、随分失望したが、大会迄には日数も相当あったので、かなり回復し、大会にはまず元気であった。

愈々大会も迫り、明治神宮始め諸神社へ勝利の祈願をなして晴れの試合を待った。

各方面から激励の電報、手紙で山をなし、わざわざ来てくれる人、会う人毎に、「しっかり頼みます」と云われる。自分一個の試合ならそれ程でもないが、此の沢山の御後援を考えるとき、責任の重大さを痛感した。

十一月十五日は空太古の様に晴れ渡りて居た。会長の挨拶、総裁宮御令旨奉読、一同国歌斉唱、愈々五十畳の青々とした畳が敷きつめられた晴れの舞台で、全日本柔道選士権大会が開始された。

試合の模様は第三者の見たのが最も公平と思ふ故、当日の朝日新聞の記事を転載する。

牧野（五段、二区）――　結城（五段、三区）

共に腰を引いて取組機をねらう。結城左背負から左の大外刈に行かんとする所、かへされアハヤ一本にならんとしたが、業有りともなり、更に接戦数合、場内を緊張さす規定の時間経過したので、先の業有りが物を言ひ牧野審判勝ちとなる――此試合には相手が右の背負に左の

大外と聞き、作戦計画して臨んだに全然反対で、最初の左背負のときなど大分ヒヤッとした。昭和の清水次郎長と云はれる氏だけあって、あの三尺の秋水を振る如き技、敵ながら感嘆させられた。

準決勝（十六日午前）

牧野（五段、二区）――高橋（三段、四区）

堂々たる対戦に延長戦となり、高橋よく牧野の業を防ぎ、制限時間となり判定にて牧野勝つ――此試合は相手を軽く見たわけでないが、強敵と思わなかった。左を極端に突張って来たが、体力も余りないので、一挙に投げ得るものと大外、跳腰と持って行ったが、案外に頑丈で面食らった。業有りで優勝したが、此試合の苦戦は午後よりの決勝戦の時に肉体的に精神的に大なる影響を與えた。「大敵恐るべからず、小敵侮るべからず」言葉をしみじみと考へさせられた。

決勝

島井安之助（五段、七区、福岡）――牧野政信（五段、二区、東京）

始め互に自重して業をかけず、にらみ合ふ。後、島井内股、牧野内股（実際は大外）に行かんとしたが、共に効を奏せず、時間延長、勝敗決せず。更に五分延長、牧野大外で猛然と攻めたが島井の巨体これを支へ、更に取組十八分を費し、更に規定時間が切れたので審判は一時預りとす。再び勝負に入る。島井大外やや効を奏し業ありとなる。規定時間到来と共に、牧野の業効を奏したが、審判既にやめを宣した後であるので、審判島井に勝ちを宣す――島井氏は豊臣時代九州第一の豪商島井氏の後裔、体重二十六貫、身長五尺六寸、天覧試合の勝者牛島五段と三度戦い、三度引き分け、高師出の鬼才小谷五段とも引分の強敵にて優勝敗けとなった。強敵ではあるが、自分としては最善を尽くして奮戦した。

決勝戦は例の松内アナウンサーにより、試合の経過をAKより全国に中継ぎ放送された。

あの白匁の下にある様な真剣の試合の中にもハッキリ、「双方共返しをとろうとして居る嵐の前の静けさそのもので風雨将に到らんとして居ります」など聞ゆる。観衆の方からも「牧野!!」「しっかり!!」などと云う声が嵐の様に聞ゆる。あの僅か二十三分が数年の長きに思へた。

此試合は自分に勝敗そのもの以外に処世行路に対して種々大なる教訓を與へてくれた。数度の難関を通り、あの決勝まで行ったから好いと云ふ気持ちと、あれまで行って敗れたのが惜いと云ふ気持、今静かに紅茶を飲みつつ晴れ渡った秋の空に無心に浮ぶ白雲を眺めて、僕の心に浮かぶものは二つの矛盾した気持ちである。

（一九三〇年十一月二十五日）

（『明柔会々報』第二号）

光陰矢の如し

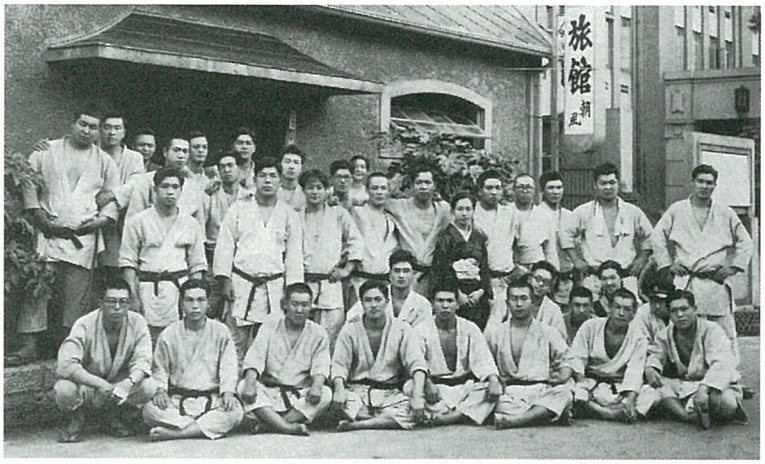
一九四〇年度卒　宮島龍治

先般の会報、渡辺（菊地）慶助先輩、と東北の高橋康君の便りを懐かしく拝見いたしました。そこで小生も、思い出多い明大柔道部時代を記してみたいと筆をとった次第です。

小生は、昭和十（一九三五）年四月の長野商業卒業の時に参段となりました。当時、明大と早大から入学の勧誘があったのですが、明治を選び入学いたしました。上京して見ると、明大柔道部は、葉山主将以下、村山要、菊地慶助、鈴鹿、宮川、三塚、豊田、山岸の諸氏等、五段の猛者がずらりと並んでおり、信州の田舎天狗のハナは見事にヘシ折られました。

当時、新入生は大学の地下道場、水道橋の講道館、池袋にあった町道場などで連日くたくたになるまで稽古をしたものです。〃自分より

弱い者とはやるな〟ということで、しばらくは人を投げる快感を忘れてしまった程でした。入部以来、いろいろな試合に出場する機会がありましたが、なかでも、学連対抗の決勝戦（対日大）のことは忘れられません。この試合で一年生の私が日大の沢田主将（五段）と当ることになり、葉山主将から「なんとしても引分けろ」と命じられ、緊張のあまり武者ぶるいをしたことがついこの間のことのように思い出されます。この勝負は幸い何とか引分けに持ちこみ、明大が優勝し、意気揚々と合宿所の駿河台ホテルに凱旋しました。



昭和13年頃の合宿参加選手たち

小生は無器用で業師ではありませんでしたが、体格は、当時としてはかなりよい方でしたので、なんとか皆と伍していくことが出来ました。

思い出の試合について述べさせてもらいますと、昭和十三（一九三八）年の第二回東西対抗戦に三船先生の推薦を頂き、小生と姿君が明大より出場しました。この大会で東軍は田中主将、曽根幸三氏（曽根康治氏の叔父）以下大いに奮戦し、講道館で祝宴をはったものでした。また、この年の全日本大会前期の部では、明大から出場した三名（姿、佐藤、小生）がそろって準決勝に進みました。ここで姿君は福岡の村上五段に惜敗し、小生は佐藤君に勝って、決勝は村上五段と小生で争いました。結果は延長の末、小生が涙をのんだのです（中略）。

翌年の十四（一九三九）年、この大会には小生と巨漢の荒井健雄君が出場しました。偶然、準決勝でまた、小生と荒井君があたり、小生が抽選負けとなり、決勝に進んだ荒井君は遊田五段と死斗をつくしたが勝負がつかず、優勝は預りとなりました。

当時、柔道部は、昭和十一（一九三六）年のアメリカ遠征、学連の満州遠征をはじめ、国内遠征も九州、信州、北海道等、盛んに地方に出かけました。部員も小遣いで全国各地を回り、土地のOBのお世話になった楽しい思い出が、今もアルバムに残っております。昭和十五（一九四〇）年、卒業してすぐ日本は戦争に突入し、間もなく、十三年の大会で小生と準決勝を戦った佐藤泰生君、千葉芳胤君等何人もの仲間が任地で逝かれました。

今日未だ哀惜の念で一杯です。（『明柔』）

思い出の柔道部

一九四〇年度卒　**高橋　康**

私が明大に入学したのは昭和九（一九三四）年四月、専門部商科、そして昭和十二年四月に法学部入学、卒業は昭和十五年三月です。

昭和十六年、現役兵として満州第二七三部隊に入隊、その後、新京の経理学校へ入学、昭和十九年、動員下命により満州からフィリピンに渡り、そこで終戦を迎えました。

陸軍主計中尉だった私は、戦犯容疑者として約一年間、山下奉文大将の隣りの収容所で捕虜生活をしました。比島から私が日本へ復員した

のは昭和二十一（一九四六）年八月七日です。

このカランバ収容所内（ルソン島）で、偶然にも逢えたのは、昭和十（一九三五）年卒業の保科永四郎主計中尉でした（五段）。

異国の比島で逢えた明大柔道部の人は保科先輩一人だけでした。

昭和十四年度の部員のこと

法学部三年の時、校友会々誌『駿台』（創刊号、昭和十四年十二月二十日発行）に「輝かしき柔道部」と題して報告したものがありましたので、それを参考に、当時の様子をお知らせします。

学連満州遠征

第十一回東京学生柔道連合軍対全満州軍対抗試合。学連選手三十六名中に、わが部から佐藤春生五段、宮島龍治五段、姿節雄五段、小宮良平五段、高橋康四段の五名が選抜された。

昭和十四（一九三九）年七月十六日午後一時より酷暑下の大連中央公園テニスコート仮設道場で全満州軍との熱戦が展開された。

小宮君は五段の二番手に出場し、篠原秋義五段と引分ける。

この辺で学生軍は三人程、リードされていた。わが部の佐藤五段は長身の藤原豊三郎六段を足払いに極めつけた。次の相手は選手権専門の部に二回優勝の二段内股の名手、中島正行六段だ。熱戦数分の結果引分けとなる。

次は学連軍大将姿五段の出場。対する相手の飯山栄作六段は前回の専門の部の選手権者であり、〝警視庁三羽烏〟とうたわれた一人である。

飯山六段は学連の副将尾崎稲穂五段（早大）をいとも易く得意技の小外刈で倒している。

リードされていた学生軍はここで対等になり、大将戦となる。姿五段は逃げ廻る飯山六段を攻めまくり、二度目の左大内刈に一本をとり、学生軍に栄冠が輝いた。

この大会の学生軍選手監督は、高広三郎七段、葉山三郎六段、満州軍は縄田喜美雄六段（明大OB）、審判として、石黒敬七七段、神田久太郎七段となっている。

大会終了後、縄田、神田、飯山先生には現地で色々と御世話になったことが忘れられない。その後、学連の選手は新京で三班に分かれ、満州各地を廻ってコーチをすることになった。私達は吉林、牡丹江、羅津、ハルピンのコースだった。

或日のこと、新京？　の大きなダンスホールへ、先輩に招待された時のことです。

先輩から、五、六枚チケットを渡され、私など踊ったこともないダンスを踊る羽目になった。洋行帰りの小宮君はうまいが、私には出来ない。先輩に気合いをかけられるのでダンサーにお願いすることにした。

初めてなので、緊張したのだろう、左技の私は左に組んでしまった。そのせいだろうか、ダンサーがよく笑う。おかしいなと思ったが、どうにもならない。一曲が終わることのなんと長かったこと。終生忘れられない思い出である。

（『明柔』'84・F）

汗こそ最良の教師

一九四一年度卒　**小宮良平**

私は昭和十一（一九三六）年に明大予科に入学し、昭和十六年、商学部を卒業しました。

午後は明大道場、引き続き当時は水道橋にあった講道館に、それが終って夜は町道場と柔道一途の明け暮れでした。

当時の師範は、学部は三船十段、予科は葉山六段で、道場も神田と和泉ヶ丘と別々でした。三船先生は柔道家らしくないなで肩の小柄な方でしたが、巨漢揃いの連中を身軽なさばきで稽古をつけられたものです。年齢は当時すでに五十を半ば過ぎておられ、白いものが相当目立っておりましたが、とても年齢を感じさせない気迫、するどい眼光、敏速な身のこなし、組み手の妙等のすばらしさが目のあたりに蘇ってきます。こちらが投げたと思った瞬間、猫の如く空中で身を翻して反対にこちらの崩れを利用しての速攻が飛んでくる。先生独特の気合「タイシェー」。まさに電光石火、何技で投げられたのかも分からない程でした。寝技にしても毬のごとくで、つかまえようがなく、また、こちらが押さえこまれると、軽い体重なのに要所を極められているから動きようがない。寝ても立っても熟達の域におられた先生の柔道は、重心、テコ、加速度の原理を示した名人技でありました。

白髪になられた晩年、純白の柔道着に真紅の帯の姿で演じられた五の形は受けの白井八段との呼吸もピッタリで、その気品に満ちた流れるような体さばきは見るものをうならせたものです。まさに〝一幅の絵〟でありました。

当時の講道館には小粒ながら得意技ではそれぞれ一家をなした名人級の先生方が数多くおられました。一方徳三宝、曾根幸三先生のように大樹に向って当り稽古をしているようで、ぶつかってははじき飛ばされ、ぶつかる前にねじり倒されるという怪力の先生方もおられたものです。（中略）

そんな大先生が出揃われる講道館の恒例の寒稽古、暑中稽古は圧巻で、稽古を見学に来る人で二階の親覧席が大そう賑わったものです。

昭和十一（一九三六）年、私の明大予科入学当時は、学部に五段が六～七人、四段は予科を含めて十人近くいって、逸材と層の厚さでは無敵の明治として他校を寄せつけない全盛を極めた時代でした。しかしどうした訳か、私が入学した年から大学選手権が中断されたため、各大学はお互いに好敵手を選んで対抗試合を行い、その腕を競い合ったものです。

その中で印象深いのは、私が予科入学早々の六月頃だったと思いますが、まだ三段（春の紅白試合に九人抜きの抜群昇段直後）なのに、一年先輩の宮嶋四段（長野県柔道連盟会長）、佐藤四段（戦死）と共に明大対全警視庁の対抗試合に予科から選ばれた時のことです。

晴れがましさと気おくれの入り交じった複雑な気持ちで、明大道場近くの朝風旅館の合宿に入りました。その合宿練習のすさまじかったことは一言で言い表せません。野武士のような面構えの猛者ばかりが、みんな眼をむき出しての大格闘で、喧嘩でもしているかのような威圧感に体がしびれたものです。

昔の学部の道場は、本館の地下室で名門の割には粗末で狭少な道場だったので、勢い余って羽目板にまともに頭をぶつけて脳震盪を起こす者、寝技をしている上に巨漢がつっ込んできて呼吸困難になる者等々、とも角、合宿目的が全警視庁の剛力、荒武者どもが相手ということで、気迫負けや暴れ負けをしないことに重点がおかれた、すさまじいばかりの荒稽古でした。

それでも、激しい練習から解放されて合宿に戻り浴衣に着替えると、これがあの恐ろしい上級生かと疑う程みんな陽気で無邪気な人達ばかりでした。馬草桶のような大きなおひつを囲んでの食事は、それはそれは賑やかで楽しいものでした。（中略）

門限などという堅苦しい規則はありませんでしたが、節度は保たれており、早朝稽古時には一人も欠ける者はおらず、このしたたかな体力には感心したものです。（『明柔』）

そんなしごきとぬくもりの調和が見事にとれた合宿も終わって、愈々試合当日となりました。選手は道場の神棚の前に二列に正座し、各人の前に折り目正しく置かれた明治のマークと氏名入りの真新しい柔道着にお神酒を注ぎ、全員柏

手を打って必勝の祈願をし、どすのきいた声で明大柔道部歌をうなって出陣式とし、柔道着姿に縁起を担いで紅白のはな緒のわら草履をはき、桜田門の警視庁特設道場に颯爽と乗り込んだものです。

会場には永岡十段を初めとする講道館のお偉方、警視庁の高官が綺羅星の如く並んでおり、新参の私はだんだんと興奮と緊張感におそわれて、すっかり上気してしまいました。葉山監督が目ざとくそれを読みとられて、「小宮君、試合前からそんなに固くならないで、自分の持っておるものを全部出しなさい。それでいい」とさりげない注意を頂き、肩をぽんと叩かれました。誠につぼを心得た励ましでした。そのお陰で勝負は引き分けでしたが、若輩としては五段相手に押し気味に戦うことが出来、満足でした。それが励みと自信につながり、その年の秋には紅白試合でまた八人抜きの抜群をやり、即日四段に昇段、一年半後には五段に推されました。

話を戻して、警視庁との試合全体の成績は、双方二勝二負十一分け、勝負なしの結果でしたが、当時の新聞には、明大一校で強豪揃いの全警視庁を相手にして堂々と戦い、五分の星を挙げたことに対し、「さすが明治」とその伝統を賞讃する記事に大いなる誇りを感じたものでした。

中でも貴重な勝ち星を挙げた姿五段（十八歳にて五段に昇段、この記録は講道館未曾有のものと思う）の、大内刈、内股、一本背負、足払と多彩な技を織り込んでの連携の妙とその切れ味は学生離れしている、と書かれた一節が今でも鮮明に私の瞼に浮かびます。

（『明柔』）

明大柔道部　修業時代の想い出

一九四二年度卒　田渕裕己

旧制福岡県立豊津中学校卒業前の昭和十四（一九三九）年二月に上京、麻布笄町に居住していた関係で、最寄の六本木、鳥居坂、赤坂各署、警視庁道場、講道館に毎日練習に通った。その頃、鳥居坂警察署の柔道教師をされていたのが、小生の旧制中学の先輩白銀一司五段であった。警視庁の助教授、教師七、八十名の中で三羽烏（白銀一司五段、故藤原勇五段、故菊地忠次郎五段）と云われ、技も切れ、大変強い先輩でよく鍛えられました。

白銀先輩の紹介により講道館で姿節雄先輩（五段）に稽古をつけていただきましたが、姿先輩は当時、東京学生柔道連盟の主将で余りにも有名でした。

これが、最初の先輩との出会いで憧れと希望に燃えて明大に入学、柔道部に入部が叶いました。その時の喜び、そして入学のため、何かと御配慮御指導下された姿先輩に感謝の念で一杯だった。有難いと思ったら一生懸命稽古にはげみ、まず学生で一位になり、やがて一、二年先輩の上位者を抜くことだと、自分なりに考え、毎日講道館の月次、紅白試合で抜群するよう、今日も今日もと人並以上に稽古に励みました。

その努力の甲斐あって、九州の田舎で中学校卒業時、旧武徳会弐段だった小生が明大入学の四月、講道館参段に昇段し、翌年一月、更に四段に昇段出来ました。

この頃の師範は三船久蔵先生（九段）で、駿河台の本館学部、専門部を指導、世田谷予科の師範は葉山三郎先生（六段）だった。葉山先生は小生の同郷の先輩でもあり、何かと御指導いただきました。三船久蔵先生には、新入生歓迎会の折、新入生七、八名が模範稽古をしていた

だき、小生もその時、先生に稽古をつけていただきましたが、先生は当時六十歳位で我々新人連中は十八歳の若さでしたが、手も足も出ず軽く手玉にとられ、本当に驚き、柔道の真髄かと呆然とさせられたことは今でも忘れることが出来ません。特に先生の足抜は「神技」だと旧制中学の恩師狭場竜夫先生が云われた言葉が事実でした。今後であれ程の先生は出ないと自分なりに痛感しております。実に素晴らしい先生でした。

当時の先輩は学生というより皆一流の先生という感じでした。全日本選手権大会ともなれば、東京代表姿節雄五段、宮城県代表佐藤春雄五段、和歌山県代表城戸勝守五段、長野県代表宮島竜治五段、茨城県代表故荒井健雄四段の各先輩が出場、まさに〝明大柔道部黄金時代〟といった感じでした。

この他、小宮良平五段、渡辺平治五段、真尾信明五段、高橋康四段、千葉芳胤四段、故斉藤雅夫四段、菅井豊吉四段、遠藤文也四段の各先輩が煌星の如くずらりと並んで稽古始めをするさまは実に壮観でした。

学生柔道界の段位実力をプロ両国の本相撲に例えるならば、五段は幕内力士、四段は十両力士、参段は幕下力士に匹敵し、相撲は本場所に出場しなければ成績が上らないように、柔道もしかり、講道館の月次、紅白試合に出場しなければ学生柔道の実力真価を問われるので、月に一度のその試合をめざして、先輩も同期生も後輩も毎日の稽古に精進した。その中から全国的大会の予選を通じて本大会に出場する者や、不運にして破れる者もあるのです。今日の学生柔道に於ても、戦前の我々の柔道修業のあり方と変わりないと思うが、一本勝でなければ勝者になれない厳しい内容の柔道は仲々に大変なことであった。

初弐段、参段までの試合は、まだ容易に勝てる機会はあるが、さすがに四段から五段までの壁は厚く、お互に実力伯仲していて、小生のように普通の体力で天分に恵まれていないものは、唯一途に研究、工夫、努力し、稽古は人の三倍位やらなければ駄目だと考え、苦しくともそれを実行せねばならなかった。

明大の稽古が終わると、仲間はそれぞれ帰宅する者が多かったが、小生は疲れた身体に鞭打って講道館で更に稽古するのは大変なことでした。余程柔道が好きでやる気がなければ、連日は続かない。こうなると、自分と自分との戦いだ、ややもすると柔道をやるのが辛くて落伍しそうになるが、無心に執念を燃やして必死で頑張った。菅井豊吉先輩は真面目で稽古熱心な先輩で小生をよく励ましてくれ、二人で一緒に講道館に通いました。

その頃、小生は世田谷区三軒茶屋の佐藤道場に寄宿していたので、帰ると道場の門人たちと稽古をせねばならず、明大の稽古、講道館に於ける稽古、更に佐藤道場での稽古とやったわけです。佐藤道場の師範は昭和の天覧試合で鳴らした三船門下生の高弟であり、警視庁師範佐藤金之助（七段）先生でした。毎日三回の稽古でくたくたに疲れて翌日の明大の稽古では誰と稽古をしても全く体の力が出ず、無心に気力だけでやりました。

今にして思えば、その稽古で柔軟な体と技が本得出来たのではないかと思います。特に小生、身長一六三センチ、体重七三キロの体格ですから、柔道部員十名いれば十番目の一番小さい方です。

日々の稽古で考えることは、中学時代から自分と同じか、または小さい相手を如何に攻め倒すか、さらに、身長体重の大きい者を如何に攻め倒すか、道場の稽古以外のときに研究、工夫して稽古に何とか活用し、やがてそれが試合に臨んでも大いに力になるようにしました。大きい者とやるときは、肘膝を連撃屈伸して下から攻め、小さい者とやるときには上から引きつけて攻める等、相手が大きくても小さくても、前後左右に体をさばいて膝の屈伸移りで技をかけ

る、手足の連撃上半身、下半身のバランスをとる等、いろいろあると思います。

明大柔道部に於いて三船先生の柔道講義には力学、心理学等が含まれ、どれほど小生、修業中に役立ったか知れません。戦後、自分の柔道修業というより生徒を育成し、自分以上に強い生徒を世に出すべく己をかけ、唯ひたすら指導に努力しました。柔道をやる者の誰しもが憧れる全日本選手権に出場出来る選手の育成、それが小生の指導の夢でした。自分が出場出来なくとも、教え子が代って出場してくれれば、自分の柔道人生はそれでも良いと思いました。

彼等を、現師範姿節雄先輩が明大に受け入れて下さり、自分の塾生として立派に育成していただいたのは、河辺一彦、岩崎勇、甲斐福男、加瀬次郎の諸君でした。本人の努力もさることながら、よき師範姿先輩御指導の賜と思います。

（『明柔』'87・L）

復活の産ぶ声　あれから既に六十年

一九四八年度卒　**古賀愛人**

マッカーサー占領下の開幕

戦後の明大柔道部が復活したのは、まだマッカーサー元帥のアメリカ占領軍が日本を統治していた昭和二十一（一九四六）年の秋深き十一月である。旧柔道部員で復学組の青木清正（商学部、日銀OB）山崎昌徳（政経学部、四国宇和島で海産物問屋経営）堀口武（政経学部、岐阜県教育庁OB）の三君と私（政経学部、十八年学徒動員で出兵、昭和二十一年、シンガポールから復員）の四人で、まず道場開きを行い、地下道場の入口に〝部員募集〟のポスターを貼った。

占領政策のもとでは〝柔、剣道は且つて軍部に協力してきた軍国主義的スポーツである〟として、中学（旧制）は勿論、大学では特に絶対やってはならないという厳しい通達があった時代である。

従って水道橋の講道館の他、町道場以外では柔道の練習はやれない状態にあった。剣道もまた同じである。

その点空手は、柔、剣道と同じ日本古来の武道の一種とされながらも除外され、大学でも従来通り運営が許されており、大学本館地下室の一角に、他の運動部と共にあった旧柔道部の道場は、この日まで空手部の道場として占領されていたのである。

私がシンガポールから帰国したのは昭和二十一（一九四六）年の五月、私の故郷は筑紫次郎の名で有名な日本三大急流の一つといわれている福岡県の筑後川のほとりである。

〝国破れて山河あり〟という漢詩があるが、この雄大な流れに身を寄せながら、私は将来の日本を考えつつ、まず復学を決意、やがて六月、駿河台の校門を再びくぐることにした。

その頃、福岡県遠賀郡芦屋町には大連市（中国）から既に引き上げてきて、町の助役に就任されていた縄田喜美雄大先輩（大正十三年卒、全日本学生初代横綱、柔道八段、大連では実業家）がおられた。